

報告：自然科学研究室教材展示『フジワラボ』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 京都市立芸術大学美術学部 公開日: 2019-03-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 玉澤, 春史 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15014/0000000239

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 4.0
International License.



報告：自然科学研究室教材展示『フジワラボ』

FUJIWARABO:

Mini Exhibition about Science Tools in Natural Science Laboratory of KCUA

Harufumi Tamazawa 玉澤 春史

概要

2018年8月1日から3日の3日間にわたり、京都市立芸術大学キャンパス内の小ギャラリーにおいて、美術学部自然科学研究室が所持していた理科教材の展示『フジワラボ』が開催された。本稿では経緯を記すとともに自然科学研究室および所蔵の教材などの来歴調査、展示に際しての自然科学者と芸術家双方の視点の違いなどに触れる。

経緯

本展示企画のきっかけは京都市立芸術大学美術学部自然科学研究室内の藤原隆男教授が2018年3月に定年退官し、後任として、磯部洋明准教授が着任したことによる。担当者の変更と、大学自体が数年後に京都駅前に移転することもあり、研究室や準備室にあった理科実験器具などを整理する必要がある。これとは別に、授業の打ち合わせにきた別の教員が、準備室の古い器具を見て展示にすることを思い立ったことが始まった。

展示に関する動きについて時系列を記載する（敬称略）。すべて2018年である。

- ・3月31日 藤原退任
- ・4月1日 磯部着任
- ・5月24日 「総合基礎」打ち合わせの為磯部、三橋、船越、総合基礎担当非常勤講師2名が集まり、自然科学研究室内の準備室にある教具を見学
- ・6月19日 自然科学研究室研究員の玉澤と京都大学の大学院生2名（河村、長島）による教材の調査
- ・7月9日 8月1-3日にキャンパス内の小ギャラリーで展示をすることが決定

- ・7月18日 担当者有志による自然科学研究室準備室備品から展示に利用する教具のチェック
- ・7月26日 学内宣伝フライヤー展開
- ・7月31日 設営、終了後に観望会
- ・8月1-3日 展示
- ・8月3日 撤収

宣伝機関が実質1週間未満であり、学内展示、さらに8月頭という補講期間・夏季休業突入という状況であったが、3日間で70人程度の来場があった。関係者の当初の想定より来場した、という印象で、普段のアトリエでの展示とは違った内容の展示に、潜在的な興味があったことが示されたといえる。



外からみた展示風景



展示スペースの一角。

以下、展示に関連するトピックにて提示する。

・教具調査

5月24日および7月18日における準備室見学・教具のチェックは、芸術系教員や学生などによる、展示品をどうするかといった観点が強いチェックである。ここではアンティークとしての価値であったり、見た目の印象の強さであったりといった観点である。

一方で6月19日に行われたチェックは、自然科学を専攻とする大学院生・研究員によるチェックで、保存状態や動作確認、またそもそもどのようなものがあるかといったチェックであり、あくまで自然科学的な観点でみている。また、資料室内の多くは現在使われていない、あるいは現在の教具・実験器具とは違う仕様のものも多く、理科教材史の観点からも確認作業が行われた。

例として、6月19日の調査についての報告のメールから抜粋する。

・顕微鏡関係

29-1 × (カビ多)

29-2 × (カビ多、レンズ焦点距離調整不可)

29-3 ○

29-4 ○ (ただしくリフレッシュ必要)

29-5 × (レンズ焦点距離調整不可)

以下使用確認せず

理-22 (No.163) 読み取り顕微鏡

理-28 (10) 顕微鏡

光学顕微鏡 光源付き

レンズセット (OLYMPUS TOKYO)

ピンセット (未使用、引き出しの中)

比色計 (島津デュボスク比色計)

スライド投影機 x2

No.1 低周波発振器 (所属：自然)

No.207 直流電圧計 (所属：自然)

No.414 真空管電圧計 (所属：自然)

番号等不明 金属標本 一組

このときの調査はラベルの有無、資料状況、また顕微鏡については使用に耐えうるかのチェックが行われている。

判明した分については展示のキャプションとして繁栄したが、使用不明な教具については調査を続けるとともに、前任者である藤原への確認なども行っている。教具の中には藤原の前任者からのものも含まれており、またいくつかは戦中戦前と推定されるものもあった。

設営前後での活動

2018年の7月下旬から8月上旬は火星が地球に最も接近している時期であり、各地で観望会がなされていた。展示開始前日・搬入日である7月31日には、設営後希望者向けに天体観望会を行い、市販の望遠鏡と準備室にあった小型の望遠鏡によって火星や土星などの観望を行った。



観望会の様子



観望会につかわれた、準備室内にあった小型の望遠鏡

また、展示期間中には準備室内の器具をつかったゲリラ的な実験・観察も行われた。1日と3日には解剖用器具をつかって魚類の解剖が行われた。また1日には静電気発生装置であるバンデグラフを実際に稼働させた（老朽化が進んでいたため2日以降は使用しなかった）。いずれも事前調査を担当した研究員・大学院生によるものであり、展示だけではわかりにくい本来の使われ方を示したワークショップともいえる。

教具使用の来歴

事前に準備を手伝ったものの中には、自分の作品に使用したいという学生等も多く展示終了後希望者には譲渡を予定していた。しかし、教具の調査後、貴重なものであると判明したものもあり、全面的な廃棄処分とはせず、貸出扱いとしたものがあつた。

また、過去にも自分の作品に使用したいということで一時的に貸し出しがあつたことが以前の使用状況に関するヒアリングからも判明した。卒業制作などには使われていないが、当時から自然科学に関する道具を芸術的な観点からみていた学生がいたのである。

自然科学の道具展示への興味：科学コミュニケーションの観点から

展示の準備は企画の発案者4、5名から徐々に協力者が増えていき、7月末日の搬入・展示準備は総勢20人以上で行われた。展示が終わったら希望者に配布、というこ

とも理由の一部にあつたのだが、準備への参加動機をきいてみると「展示準備の参加自体がおもしろかった」という意見が散見された。芸術系大学であり、展示準備にはなれていないはずであるが、それ以外の点に魅かれて参加した人間も多かったのである。



展示準備作業の様子

展示の主要なポイントは「かっこよさ」「雰囲気」「アンティーク的」といったものである。一方で自然科学側の希望としては見た目から連想されるかっこよさから本来の目的への興味という流れを展示の中でアシストする必要があつたが、単純に見た目の面白さからそれがどのような目的の道具であるかといった興味のスライドは（自然科学側が想定していたよりも）自然に行われていた。むしろ、その疑問に対する回答の作成・想定が当初の予想以上に難しかったことが理科教育史・アーカイブズの観点からみても興味深い点である。

自然科学への興味をどのように涵養するか、というのは常に問われる課題であるが、自然科学だけでなく多分野とのコラボレーションの企画には、自然科学への興味が必ずしも高いわけでない層が参加する傾向があり、本展示企画は「モノ」という観点から自然に流れていったと思われる。他分野の以前使用していた道具への興味、というのは自然科学と芸術といった範囲だけでなく、美術学部のなかでも同様のことが起こりうる。この点は企画段階でも指摘されており、今後は各専攻間で同様のことが可能かもしれない。

さらに、企画側からの意見として、今まで意識しなかった大学の歴史の一面を感じる、ということもコメントされていた。大学は様々な専門家が集まる場所であるが、自分の専門以外の状況というのは把握しにくく、実際にモノを通して触れてみるというのは学生だけでなく教員にも貴重な経験だったといえよう。

付記

「フジワラボ」展示には特に名乗らず協力していただいた方を含め、多数の方の協力により行われた。

展示会場内に記されたステートメントに記載されている関係者は以下のとおりである。本稿はこの関係者からへの質問を含んでいるが、関係者全体の総意ではなく、投稿者による見解である。

藤原隆男（宇宙物理学 / 教授 ※ 2018 年度退職）

磯部洋明（宇宙物理学 / 准教授）

三橋遵（染織 / 教授）

玉澤春史（宇宙物理学 / 研究員）

村上花織（総合基礎実技 / 非常勤講師）

本山ゆかり（総合基礎実技 / 非常勤講師）

黒川岳（総合基礎実技 / 非常勤講師）

平田万葉（総合基礎実技・陶磁器 / 非常勤講師）

河村聡人（京都大学理学研究科附属天文台）

長島瑠子（京都大学総合生存学館）

ジェイソン

なお、「ジェイソン」とは準備室内にあった人体標本につけられた名前であり、学内にくばられたフライヤーには肩を組む藤原とジェイソンの写真がつかわれた。